

## 小学校国語科における比喩表現の指導について

奥田 俊博\*

### A Study of Teaching of figurative expression in Japanese Language Teaching of Elementary School

Toshihiro OKUDA\*

#### Abstract

This paper considers teaching method about figurative expression in Japanese language teaching of Elementary School. Out of explanation related with figurative expression in schoolbooks of Elementary School, this paper considers figurative expression: simile, metaphor, and metonymy. And, this paper analyzes teaching method about figurative expression.

About guidance of figurative expression, it is necessary for teachers to understand not only figurative expression of simile and metaphor but also figurative expression of metonymy.

**KEY WORDS** : figurative expression, simile, metaphor, metonymy

#### 1. はじめに

##### 1. 1 小学校国語科における比喩の指導

小学校学習指導要領は、平成20年に新学習指導要領が公表され、平成23年度より全面実施された。小学校国語科については、新学習指導要領の国語科の目標は、旧学習指導要領の国語科の目標と同じであるが、基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けることに、より重点を置いた改訂がなされた。その基本方針として、

1) 小学校、中学校、および高等学校を通じて、言語の教育としての立場を一層重視し、国語に対する関心を高め、国語を尊重する態度を育てるとともに、国語の能力を身につけること、言語文化を享受し継承・発展させる態度を育てることに重点を置いて内容の改善を図る。

2) 〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事

項〕を設け、言語文化に親しむ態度を育てたり、国語の役割や特質についての理解を深めたり、豊かな言語感覚を養ったりするための内容を示す。

3) 子どもたちの発達の段階を踏まえた学習の系統性を重視し、学校段階・学年段階ごとに、具体的に身に付けるべき能力の育成を目指し、重点的な指導が行われるようにする。

などが挙げられ、言語の教育としての立場を一層重視する方向にある。言語教育重視の方向の中で、新学習指導要領では、今回、比喩についての指導事項が新たに設けられ、第5学年・第6学年の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の「イ 言葉の特徴やきまりに関する事項」において、(ア)「話し言葉と書き言葉との違いに気付くこと」、(イ)「時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くこと」、(ウ)「送り仮名や仮名遣いに注意して正しく書くこと」、(エ)「語句の構成、変化などについての理

\*九州共立大学  
\*九州女子大学共通教育機構

\*Kyushu Kyoritsu University  
\*Kyushu Women's University

解を深め、また、語句の由来などに関心をもつこと」、(オ)「文章の中での語句と語句との関係を理解すること」、(カ)「語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつこと」、(キ)「文や文章にはいろいろな構成があることについて理解すること」、(ク)「日常よく使われる敬語の使い方慣れること」の項目とともに、(ケ)「<sup>レ</sup>比喩や反復などの表現の工夫に気付くこと」が新設された。この指導事項について、「小学校学習指導要領解説 国語編」(平成20年6月、文部科学省)は、「具体的な表現の工夫には、<sup>レ</sup>比喩や反復をはじめとして様々なものが考えられる。擬声語・擬態語、語句の反復、誇張などは低学年の児童が読んだり書いたりする文章中にも頻繁に見られる。学年が進行するにつれて<sup>レ</sup>直喩、<sup>レ</sup>隠喩などの<sup>レ</sup>比喩やユーモア、また、省略、倒置、対句など構成上の工夫も多くなる。そこで、多様な文章に表れる様々な表現の工夫に気付いたり、自分の表現に活用したりするように指導することが大切である」(第3章第3節「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の「表現の工夫に関する事項」と述べており、表現の工夫の代表的な例示として、<sup>レ</sup>比喩、反復が挙げられ、また、同「小学校学習指導要領解説」(第3章第3節「C読むこと」[エ 文学的な文章の解釈に関する指導事項])では、文学的な文章の解釈を、上記の(カ)「語感、言葉の使い方に対する感覚などについて関心をもつこと」、(ケ)「<sup>レ</sup>比喩や反復などの表現の工夫に気付くこと」などと関連させて指導すると効果的である旨が記載されている。

## 1. 2 検討の方法

本稿では、まず<sup>レ</sup>比喩の概念について整理を行い、その後、現在出版されている主要な国語教科書のうち、4種の教科書<sup>1)</sup>を取り上げ、<sup>レ</sup>比喩の取り扱いについて整理を行い、さらに、教科書の教材に用いられる<sup>レ</sup>比喩の具体例の分析を行う。また、併せて、<sup>レ</sup>比喩表現の指導において留意すべき事項について考察を行う。取り上げた教科書の教材は、各教科書会社が提供する年間指導計画<sup>2)</sup>において、「小学校学習指導要領」第5学年・第6学年の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の「イ 言葉の特徴やきまりに関する事項」、(ケ)「<sup>レ</sup>比喩や反復などの表現の工夫に気付くこと」を掲げている教材を中心に取り上げた。

## 2. 比喩の種類

教科書に記載されている<sup>レ</sup>比喩の記述および<sup>レ</sup>比喩表現を検討する前に、<sup>レ</sup>比喩について整理を行っておく必要がある。すでに、奥田俊博(2009)において、代表的な<sup>レ</sup>比喩の種類と用法については整理を行っている。ここでは、奥田俊博(2009)の内容と重複するが、<sup>レ</sup>比喩の種類と用法について簡単に触れておきたい。

### 2. 1 直喩と隠喩

直喩と隠喩は形態面において差が存するが、両者の親近性については、すでに五十嵐力(1909)、中村明(1977)が指摘している。直喩と隠喩の親近性は、たとえられる対象とたとえになる対象との関係において、「直喩」と「隠喩」がともに類似性のある点が大きく関係している。この問題についてさらに検討を加えた瀬戸賢一(1995)は、「メタファーとシミリーとの間には決定的な溝があるとは思えない。両者には、明示度(逆にいえば、含蓄度)の差という量的差異は存在するが、質的な差が存在するとはいえないのではなからうか」と述べ、直喩と隠喩を連続的に捉える。

直喩と隠喩における「意味的緊張度」は、さらに、「直喩」と対比的表現との連続性とも関係する。「彼女はアゲハチョウに似て美しい。」は直喩として認められるが、「彼女は彼女の母に似て美しい。」は直喩と看做すか否か判断が揺れる例である。後者の例においては類似性が弱まり、対比性が前面に出る表現になっている。このような連続性を踏まえて、直喩と隠喩との関係について考えてみると、「彼は猪のようだ。」、「彼は猪だ。」といった「AはBのようだ。」「AはBだ。」といった<sup>レ</sup>比喩表現の連続性が問題となろう。「彼は猪のようだ。」と「彼は猪だ。」の差は、形態面、心的態度の点から認められる。形態面においては、「のようだ」と「だ」の相違であり、形態上の差が両者の相違点として最も説明を行いやすい。また、意味面においては、「彼は猪のようだ。」、「彼は猪だ。」の「猪」は、意味の転化の点において差が存すると言える。「彼は猪だ。」の「猪」が本来的な意味の転化によって<sup>レ</sup>比喩表現として成り立っているのに対し、「彼は猪のようだ。」の「猪」は、「のよう」が下接している分、本来的な意味を色濃く残している。本来的な意味を色濃く残している点が直喩の意味面の特徴であり、それゆえ、様々な表現を「のよう」「みたいに」等を下接することによってたとえられるものとの関係を表

現することが可能になると考えられる。

直喩と隠喩の共通点と相違点は、おおよそ以上のよう<sup>1</sup>にまとめられるが、小学校国語科においても、中学校国語科と同様、直喩と隠喩を区分するか否かについては、さほど大きな問題でない。教科書Aのように区分せずに「比喩」として括る立場もあり得るし、教科書Bのように直喩と隠喩とを区分する立場も認められよう。

## 2. 2 換喩

学校教育においては、比喩の代表的な型として、直喩と隠喩が挙げられるが、比喩表現の代表的な一種として、換喩を挙げることが可能であろう。換喩については、すでにFontanier (1827) が換喩の種類として、「原因によって結果を表す換喩（結果としての原因）」、「道具・媒介物によって動作的、精神的な原因を表す換喩」、「生産される場所によって産物を表す換喩」、「記号によってその記号が意味する事物を表す換喩」、「肉体によって精神を表す換喩」、「主人によって主人の所有物を表す換喩」を挙げる。また、中村明 (1977) は、「英語のmetonymyにあたる喩法で、提喩に非常によく似ている、と言うか、原理はほとんど同じだが、提喩が全体と部分という関係にあるのに対し、この換喩のほうは主体と属性という関係が中心になる点で区別される。ただし、その主体と属性という関係として一括されるものの中身はかなりいろいろで、連想されるものなら何でもいいほどだ。」と換喩の範囲の広さを指摘する。換喩の概念については、その他、山梨正明 (1988) の「換喩 (metonymy) は、ある一つのものを、それに関係した他のものによって表わす言葉のあやの一種である。この場合、問題となる二つのもの間の関係は、空間的な隣接性や近接性、共存性による関係であったり、また時間的な関係、因果的な関係であったりする」、瀬戸賢一 (1997) の「メトノミーとは、(現実)世界のなかで隣接関係にあるモノとモノとの間で、一方から他方へ指示がずれる現象のことを言う」のように簡潔で要を得た説明があるが、隠喩や直喩との関係でいえば、隣接性に基づく比喩である換喩(メトノミー)は、たとえられる対象とたとえになる対象とが、空間的、時間的に隣接の関係にあり、また、たとえになる対象の基本的意味が転化している、と定義づけることが可能であろう。

## 3. 教材に見える比喩表現

### 3. 1 比喩表現を中心とした教材

本稿1.2で触れた4種の教科書のうちの2種の教科書は、「小学校学習指導要領」第5学年・第6学年の〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の「イ 言葉の特徴やきまりに関する事項」(ケ)「比喩や反復などの表現の工夫に気付くこと」の指導を中心とした教材である「言葉の泉<sup>いづみ</sup>1 さまざまな表現の工夫<sup>くふう</sup>」,「表現をくふうして書こう」がある。「表現をくふうして書こう」では、比喩、反復、倒置が、「言葉の泉<sup>いづみ</sup>1 さまざまな表現の工夫<sup>くふう</sup>」では、反復、名詞止め、倒置、比喩(擬人法)が取り上げられる。「言葉の泉<sup>いづみ</sup>1 さまざまな表現の工夫<sup>くふう</sup>」では、「しんくしてほった土の底から／ 大きな山芋をほじくり出す／ 出てくる 出てくる／ でっこい山芋／ でこでこ 太った指の間に／ しっかりと 土をにぎって／ どっしりと重たい山芋／ おお こうやって 持ってみると／ どれもこれも百姓の手だ」(大関松三郎「山芋」)を題材にして、反復(「出てくる 出てくる」)、名詞止め(「でっこい山芋」「どっしりと重たい山芋」)、倒置(「出てくる 出てくる／ でっこい山芋」)、比喩(擬人法)「しっかりと 土をにぎって」)が取り上げられているが、「太った指」「百姓の手」も比喩(隠喩)として認められよう。一方、「表現をくふうして書こう」では、「次の文章や詩では、何を何にたとえているでしょう」という発問の後、「二人のわかいしんしが、すっかりイギリスの兵隊の形をして、ぴかぴかする鉄ぼうをかついで、白くまのような犬を二ひき連れて、……」(「注文の多い料理店」より)、「墓地には、ひがんばなが、赤いきれのように、さき続いていました」(「ごんぎつね」より)、「夕日がせなかをおしてくる／ まっかなうででおしてくる／ 歩くぼらのうしろから／ でっかい声でよびかける」(「夕日がせなかをおしてくる」より)、「頭を雲の上に出し／ 四方の山を見下ろして／ かみなりさまを 下に聞く／ 富士は 日本一の山」(「富士山」より)を掲げている。ここでの主眼は、「白くまのような」「赤いきれのように」といった直喩や「まっかなうで」の「うで」や「頭を雲の上に出し」の「頭」といった隠喩であるが、「夕日がせなかをおしてくる」や「富士山」では、夕日や富士山を人間にたとえており、その人間へのたとえ、すなわち擬人法が詩全体を覆っていることにも生徒に気づかせたいところであろう。

### 3. 2 直喩・隠喩の表現

一方、残る2種の教科書は、「小学校学習指導要領解説 国語編」第3章第3節「C読むこと」(「エ 文学的文章の解釈に関する指導事項」)に沿って、文学的文章の中で喩表現の指導ができるようになっていく。教科書に掲載されている文学的文章のうち、各社の指導計画において喩の指導を行うことを計画している文学作品である、宮沢賢治「雪わたり」(5年生教材)、いぬいとみこ「川とノリオ」(6年生教材)、杉みき子「わらぐつの中の神様」(5年生教材)、宮沢賢治「やまなし」(6年生教材)を取り上げて検討を行いたい。

まず、直喩の例として、

- (1) 木なんか、みんなザラメをかけたようにしもでびかびかしています。(「雪わたり」)
- (2) 雪はチカチカ青く光り、そして今日も寒水石のようにかたくこおりました。(同上)
- (3) 「そらあげますよ。」「そら、取ってください。」なんて言って、風のようににげ帰っていきます。(同上)
- (4) ときどき、じいちゃんの横顔が、へいけがにのよう<sup>に</sup>、ぎゅっとゆがむ。(「川とノリオ」)
- (5) 上の方や横の方は、青く暗く鋼<sup>はがね</sup>のよう<sup>に</sup>見えます。(「やまなし」)
- (6) かにの子どもらも、ぼつぼつぼつと、続けて五六つぶあわをはきました。それは、ゆれながら水銀のように光って、ななめに上の方へ上っていきました。(同上)
- (7) にわか<sup>に</sup>天井に白いあわが立って、青光りのまるでぎらぎらする鉄砲だま<sup>の</sup>ようなものが、いきなり飛びこんできました。(同上)
- (8) 兄さんのかには、はっきりとその青いものの先が、コンパスのよう<sup>に</sup>黒く<sup>と</sup>がっているのを見ました。(同上)
- (9) 波は、いよいよ青白いほのおをゆらゆらと上げました。それはまた、金剛石<sup>ごう</sup>の粉<sup>ご</sup>をはいているよう<sup>に</sup>でした。(同上)

などの例が挙げられる。いずれも、「(まるで) ~のよう<sup>に</sup>、よう<sup>です</sup>」という直喩の典型的な表現を伴った直喩であるが、中には、

- (10) 雪がすっかりこおって大理石よりもかたくなり、空も冷たいなめらかな青い石の板<sup>で</sup>できて<sup>いる</sup>らしいのです。(「雪わたり」)
- (11) その横歩きと、底の黒い三つのかげ法師が、合わせて六つ、おどる<sup>よう</sup>にして、やまなしの円い

かげを迫<sup>い</sup>ました。(「やまなし」)

など、非典型的な表現による直喩も見える。これらも、類似性に基づく喩表現であり、「たとえ」の表現として理解させることが必要であろう。同様のことは、

- (12) ごま塩のひげがかすかにゆれて、ぼつとり、ひげにしずくが落ちる。(「川とノリオ」)
- (13) 平らなことは、まるで一まいの板です。(「雪わたり」)
- (14) お月様は、まるで真じゆのお皿です。お星様は、野原のつゆがキラキラ固まったようです。(同上)

などのような、隠喩とも直喩とも理解することが可能な例についても言えよう。すでに述べたように、直喩と隠喩は、ともに類似性に基づく喩であり、その境界は明確ではなく、連続的に捉えられるものである。

(12)~(14)の表現を、直喩であるか隠喩であるか明確にすることにさほど意義は認められない。なお、「やまなし」で用いられる直喩は、川の様態を対象にした場合は、鉱物(「鋼」「水銀」「金剛石」)が用いられること、かわせみを対象とするときには、武器や鋭利な道具(「鉄砲だま」「コンパス」)が用いられており、直喩の表現同士が互いに関連しあっている点を気づかせることも必要であると言えよう。

一方隠喩については、

- (15) お日様が、真っ白に燃えてゆりのにおいをまきちらし、また雪をぎらぎら照らしました。(「雪わたり」)
- (16) すすきのほが、川<sup>つ</sup>ぶちで旗をふ<sup>つ</sup>た。(「川とノリオ」)
- (17) 川の水がノリオを呼んでいる。白じらと波だつて笑いながら。(同上)
- (18) ノリオは、もう片方のくりのげたも、夢中で川の上に投げてやった。げたは、新しい裏を見せて、仲間のあとを追っかけていく。(同上)
- (19) にわか<sup>に</sup>ぱつと明るくなり、日光の黄金<sup>きん</sup>は、夢<sup>の</sup>よう<sup>に</sup>水の中に降<sup>り</sup>てきました。(「やまなし」)
- (20) 光のあみはゆらゆら、のびたり縮んだり、花びらのかげは静かに砂をすべ<sup>り</sup>ました。(同上)

などのように、擬人法の用法が多い点が留意されよう。事物の動作・作用を人間の動作・作用と類似させる擬人法の表現の面白さを味わえるようにしたい。また、中には、

- (21) その冷たい水の底まで、ラムネのびんの月光が**いっぱい**にすぎ通り、天井では、波が青白い火を燃やしたり消したりしているよう<sup>に</sup>。辺りはしんとして、ただ、いかにも遠くからというように、そ

の波の音がひびいてくるだけです。（「やまなし」）

のように直喩と隠喩が組み合わされた表現も見える点は注意したい。

### 3. 3 換喩に基づいた表現

本稿で、検討の対象とした教科書に掲載されている表現で注意されるのは、

(22) けれども、市で野菜を売っている間も、あの雪  
げたことが、おみつさんの頭をはなれません。  
（「わらぐつの中の神様」10p）

(23) 「へええ、それ、わらぐつかね。おらまた、わ  
らまんじゅうかと思った。」などと、あけすけな  
ことを言う、口の悪い人もいます。（「わらぐつ  
の中の神様」15p）

の「頭をはなれません」「口の悪い」といった換喩に  
基づく慣用句である。ここでは、「頭」はその中身の  
「心」を表し、「口」は、口から発せられる「言葉」  
を指す。両者の関係は隣接的であり、定着した換喩表  
現として認められるものである。「換喩」という用語  
を教える必要はないが、「頭」が心を表し、「口」が言  
葉を表すことは指導すべきであろう。また、中には、  
原因と結果の関係により、心情が身体の動作となって  
表現される換喩表現の例として、

(24) 四郎は、こまってしまつて、かたをすくめて言  
いました。（「雪わたり」）

(25) かん子は、はずかしくてお皿を手に持ったまま、  
真っ赤になってしまいました。（同上）

(26) きつねの学校生徒は、もうあんまり喜んで、み  
んなおどりがってしまいました。（同上）

(27) 四郎もかん子も、あんまりうれしくて、なみだ  
がこぼれました。（同上）

(28) きつねの生徒は、みんな感動して、両手を上げ、  
ワーッと立ち上がりました。（同上）

の「かたをすくめて」「真っ赤になってしまいました」  
「おどりがってしまいました」「なみだがこぼれま  
した」「両手を上げ、ワーッと立ち上がりました」な  
どの表現が多く見える点も注意させたい。これらの例  
では、これらの身体の表現の原因となる心情の表現が、  
波線部「こまってしまつて」「はずかしくて」「あんま  
り喜んで」「あんまりうれしくて」「感動して」のよう  
に明示されているが、

(29) おみつさんは、真っ赤になって、口の中で何か  
もごもご言いながら、にげるように店の前をはな  
れました。（「わらぐつの中の神様」）

(30) おみつさんは、やはりきまりが悪くなって「あ  
んまり、みっともよくねえわらぐつで——。」と、  
赤くなりながら、おずおずとわらぐつを差し出し  
ました。（同上）

などの例では、身体の動作だけが表現されており、こ  
の動作から心情を読みとらせることが必要となろう。

このように換喩の表現を捉えるならば、本稿3.1に引  
用した「夕日がせなかをおしてくる／ まっかなうで  
でおしてくる／ 歩くぼくらのうしろから／ でっか  
い声でよびかける」（「夕日がせなかをおしてくる」よ  
り）の「夕日がせなかをおしてくる」は、擬人法であ  
るとともに、帰宅を促す、という心情を表す換喩的な  
表現として捉えることが可能である。さらに、換喩に  
基づいた表現は、

(31) それから、大工さんは、いきなりしゃがみこん  
で、おみつさんの顔を見つめながら言いました。

「なあ、おれのうちへ来てくれないか。そして、  
いつまでもうちにいて、おれにわらぐつを作つて  
くれないかな。」おみつさんは、ぼかんとして、  
大工さんの顔を見ました。そして、しばらくして、  
それが、おみつさんにおよめに来てくれというこ  
となんだと気がつくと、白いほおが夕焼けのよう  
に赤くなりました。（「わらぐつの中の神様」20p）

の下線部にも窺える。大工さんのプロポーズのことば  
であるが、下線部は、結婚する、という出来事とわら  
ぐつを作る、という出来事が隣接の関係になっている  
ものである。このような表現も注意させる必要があ  
らう。

### 4. おわりに

以上、小学校国語科における比喩表現として、教科  
書における比喩表現の取扱い、慣用句に見られる比喩、  
直喩、隠喩、換喩といった比喩技法、および教材に見  
える具体的な比喩表現について検討を加えてきた。

「頭をはなれません」「口の悪い」といった慣用句に  
は換喩に基づく比喩表現が用いられていること、およ  
び、「夕日がせなかをおしてくる」「なあ、おれのうち  
へ来てくれないか。そして、いつまでもうちにいて、  
おれにわらぐつを作つてくれないかな。」といった表  
現を理解するためには換喩の知識を必要とする点を勘  
案するならば、指導者の側においては、直喩や隠喩だ  
けでなく、換喩の知識を修得することが求められる。  
一方、学習者の側においては、小学校高学年において  
は、類似性に基づく比喩である点で、直喩と隠喩を連

統的に捉えられること、また、直喩と隠喩の境界的な表現が見えることを考慮した場合、直喩・隠喩・換喩の理解を踏まえた表現を指導する必要性がないと考えられる。むしろ重要なのは、比喩表現が類似性に基づく比喩と隣接性に基づく比喩があることを具体的な例を通じて理解させ、表現の工夫に注意させることであろう。

Received date 2012年1月17日

## 注

- 1) 本稿で取り上げた教科書は次の通りである。『みんなと学ぶ 小学校 国語 五年上』(学校図書, 平成23年2月), 『みんなと学ぶ 小学校 国語 五年下』(学校図書, 平成23年7月), 『みんなと学ぶ 小学校 国語 六年上』(学校図書, 平成23年2月), 『みんなと学ぶ 小学校 国語 六年下』(学校図書, 平成23年7月), 『ひろがる言葉 小学国語 5上』(教育出版, 平成23年1月), 『ひろがる言葉 小学国語 5下』(教育出版, 平成23年6月), 『ひろがる言葉 小学国語 6上』(教育出版, 平成23年1月) 『ひろがる言葉 小学国語 6下』(教育出版, 平成23年6月), 『新しい 国語 五上』(東京書籍, 平成23年2月), 『新しい 国語 五下』(東京書籍, 平成23年7月), 『新しい 国語 六上』(東京書籍, 平成23年2月), 『新しい 国語 六下』(東京書籍, 平成23年2月), 『国語 五 銀河』(光村図書, 平成23年2月), 『国語 六 創造』(光村図書, 平成23年2月)
- 2) 年間指導計画については、各教科書会社のホームページに掲載されている年間指導計画(「平成23年度版「みんなとまなぶ しょうがっこう こくご」年間指導計画・評価計画作成資料」(学校図書), 「平成23年度版 年間学習指導計画・評価計画面案(国語)」(教育出版), 「平成23年度版「新しい国語」年間指導計画」(東京書籍), 「平成23年度版年間指導計画」(光村図書))を参照した。
- 3) 本稿では、教材を引用する場合、改行箇所を斜線「/」で示した。

## 引用文献

- 五十嵐力(1909)『新文章講話』(早稲田大学出版部)
- 奥田俊博(2009)「国語の授業における比喩表現の指導について—中学校国語を中心に—」(「九州女子大学紀要」45巻3号)

- 瀬戸賢一(1995)『空間のレトリック』(海鳴社)
- 瀬戸賢一(1997)「意味のレトリック」(中右実編『日英語比較選書1 文化と発想とレトリック』研究社出版)
- 中村 明(1977)『比喩表現辞典』(角川書店)
- 山梨正明(1988)『認知科学叢書17 比喩と理解』(東京大学出版会)
- Fontanier, Pierre (1827) *Les Figures Du Discours avec une introduction par Gerard Geette*, 1977, Paris: Flammarion.